渡島フロンティア人材育成事業による世界遺産を活かした探究活動の実践
～学校種間の円滑な接続を目指して～

北海道南茅部高等学校　学級数３　（校長　伊勢　一哉）

１　取組の背景

渡島教育局事業である「渡島フロンティア人材育成事業」の指定を受け、世界遺産である「縄文文化」の継承を課題とし、小・中・高で児童生徒の発達段階に応じ、探究的な学習を継続的に進めている。また、ふるさとへの愛着を育むとともに、未来の社会を生き抜く資質・能力を身に付けた人材の育成を図ることを目指し、地域の他校種と連携した取組を進めている。

２　研究内容と取組の具体

(1) 地域の住民自身が、地域の良さを知る取組の充実

学習指導要領において、学校や地域の実態等に応じ、家庭や地域社会との連携及び協働を深めることがこれまで以上に求められており、「縄文文化」の継承にこの視点が重要であると考えるが、地域住民による世界遺産認定への期待の高まりは幾分弱い傾向が見られる。

実践交流会に取り組む代表生徒

そこで、地域で一体となった取組をすることが「縄文文化」の継承への鍵になると捉え直し、児童生徒が地域の大人へ地域のよさを伝え、子どもが大人を巻き込んでいくという「逆転の発想」で取組を進めようと考えた。

具体的には、本校を会場に、地域の小・中学生を招き、小・中・高の学びを整理し、その地域のよさを捉え直すことを目的とした「交流会」を本校１年生がコーディネーターとなり実施した。この「交流会」により、それぞれの活動から得られたものを再定義し、「縄文文化」の素晴らしさを再実感した様子であった。

今後は、この活動を地域の大人とともに伝え、考える機会として「地域交流会」の開催を検討しており、地域で一体となった取組としていきたい。

(2) 校種間によるカリキュラム内容の検討

この事業を開始するにあたり、地域の学校及び関係機関が一堂に会する「推進協議会」を開催した。会議では各校種からそれぞれの「縄文学習」について報告があったが、報告内容を聞くと比較的、活動内容に重複が多いこと、また、活動のみで終えており、振り返りが少ないこと等いくつかの課題が見られた。

推進協議会における情報交換

こうしたことから、今後本事業を通して、発達段階に応じた、系統的・計画的な探究活動による「縄文文化」の醸成を図ることとした。教育局にコーディネーターとなっていただき、カリキュラムの重複の見直しを図っており、こうした成果を関係機関に伝えることができればと考えている。

３　「求める生徒像」に合致させた資質・能力の育成

本校は、スクール・ポリシーに掲げる「求める生徒像」として「社会や地域の一員としての自覚を持ち、自らの成長のために他者と協働しながら挑戦を試みようとする生徒」を掲げている。そして、こうした生徒を育成するためには、カリキュラム・マネジメントによる教育活動の質の向上に努める必要があると考えている。

とりわけ、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことが「縄文文化」の継承、探究活動の充実には不可欠の要素である。幸いにして本校を取り巻く環境は、「函館市縄文文化交流センター」をはじめ関係機関の協力が大変充実しており、地域の小・中学校とともに本事業を通した資質・能力の育成に一層努めていく所存である。

本校生徒が「ふるさとへの愛着」を胸に、未来を生き抜く力をもち巣立って欲しい。